

# 文学の力信じる学者の矜持

中国文学研究者の藤井省三さんが、3月末日に東大教授の定年を迎えるのを前に「魯迅と現代東アジア文学史」と題して最終講義を行った。「魯迅が好きだった少年が、30年、40年かけて東アジアを視野に入れた文学史を構想するに至るまでを振り返りたい」。ユーモアを交えながらの語り、同僚や教え子、編集者や作家ら約250人が熱心に耳を傾けた。

## 藤井省三さん最終講義

1952年東京生まれ。修士課程の頃に名誉教授だった小野忍に出会った。中国では文化大革命が起きていた。「家庭や学校への反発から、文化大革命への反感にスツとつながった」。高校時代には竹内好の著作や竹内訳の魯迅作品をむさぼり読む。「研究をするようになってから竹内さんの魯迅の作品評をみると、随分あらうばいものだったと分かる。でもその単純明快さは高校生には理解しやすかった」

## 「武力衝突止めることも」

中国の状況を見て留学生同士で「中国の社会主義にはもう幻想を持ってないね」と言い合った。「自分の留学が順調じゃなかったの、夏目漱石のロンドン留学に親近感を覚えた」。帰国後、漱石と魯迅を比較研究した。知り合いの記者に「近代100年を視野に入れなければならない」と言われて「巴金や鄭義、莫言ら同時代作家も研究対象として」

### 短 信

★4月15日に「石牟礼道子さんを送る」2月10日に亡くなった作家の石牟礼道子さんをしのぶ会「石牟礼道子さんを送る」が4月15日午後3時から6時まで、東京都千代田区有楽町2の5の1、有楽町マリオン11階「有楽町マリオン朝日ホール」で開かれる。主催はNPO法人「水俣フォーラム」。

★文楽大賞に鶴沢燕三 2017年度の人形浄瑠璃文楽公演で活躍した演者に贈る第37回国立劇場文楽賞の大賞が、三味線の鶴沢燕三に決まった。贈賞式は4月7日、大阪・国立文楽劇場で。他の文楽賞各賞と、若手が対象の文楽協会賞は次の通り。



最終講義をする東大教授の藤井省三さん—東京都文京区の東大本郷キャンパス

月単位で魯迅が読んだ近代文学を読み、その月に魯迅が発表した作品を読んでいた。89年の天安門事件の際には「中国文学者としてどうしていいか分からなくなった」。そんな時、雑誌「ユリイカ」の編集長から中国文学の特集を組む提案があった。「どう生きればいいのか分からないのに、文章なんか書けない」と断ると「そういう時だからこそ書けよ」と返された。ユリイカに論考を載せたことで「もう一度、中国文学と向き合う姿勢を持つことができた」。94年、東大教授に。

関心は台湾や香港、シンガポールにまで。東ア

## ■春が来た

インフルエンザが猛威をふるった今年の冬は格別に寒かったし長かった。それだけに春を待ちわびる気持ちも強かったが、3月に入りようやく春が来たなど感じられるようになった。風はまだ少し冷たいけれど明るくてやわらかな暖かい日差しは春が来たことを教えてくれ、気持ちも弾み今日このごろ。

## サヌカイト

早く見つけたのは田んぼのあぜ道だったし、トンボが咲き始めたのを見つけたのは川のほとりだった。(さぬき市中野香代子・66歳)

「サヌカイト」の原稿を募集しています。400字にまとめ、住所、氏名、年齢、電話番号を明記。〒760-8572 四国

## 「猫見酒」



8 神奈川の穴場スポット

目が合うと、その猫はコテンと体を横にした。ロイヤルミルクティーのような色をしたきれいな猫だ。のらだといつに人懐っこいその子はおおむけになり、「なでて」というように真っ白いおなかを丸出しにする。もふもふのおなかをなでると、気持ちよくなる。目を細めては、出会ってほしい、私はその猫のどこかになつてしまつた。



のらなののに人懐っこい猫と、遠くで様子を見る猫—神奈川県三浦市

## 体から毒素が抜けていく

しするのライフワークが、警戒心が強さうの子のよ。天気が良い、地面がさらさら進むと、たたかいのを全身で喜ぶ。匹の猫がいた。にこすりつけ、お日さまを浴びている。そんな姿を見ているだけで体じゅうから毒素が抜けていく。公園の奥に向かうと、今度は別の猫が迎えてくれた。日なたの枯れ草の中で休んでいたのは長毛の猫。メインクーンやノルウェージャンフォレストなど、猫見酒には血が入っていることを思わせる、風格漂う猫だ。

## くらし・文化

神奈川県・三浦半島の